

Views of Unification and Boundaries in Late Silla and Parhae

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00000210

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



後期新羅・渤海の統合意識と境域観

古畑 徹

一、はじめに

二、後期新羅の統合意識と境域観

(1) 後期新羅の北境観

(2) 後期新羅における「三国一統」意識の成立

(3) 後期新羅の三国統合政策と「三国一統」意識の成立

三、渤海の統合意識と境域観

(1) 渤海の領域拡大過程と高句麗継承意識

(2) 渤海の「北方東夷」諸族統合意識

(3) 統合意識・境域観の変化の背景

四、おわりに

一、はじめに

渤海史は近代国家的枠組みに基づく「自国史」同士の「争奪」の典型例といつてよい。韓国・北朝鮮では、渤海を既に成立していた自明の「朝鮮」という世界に登場した国家と見なし、七世紀末から一〇世紀初を新羅と渤海による朝鮮のいわゆる「南北朝時代」とみる見方が隆盛で、渤海と中国東北史との関係を排除する^①。そこに示された朝鮮史像は、もともと存在した朝鮮民族が、高句麗・百濟・新羅による三国鼎立、渤海・新羅による南北両立という時代を経て、高麗によって統一されるという形だが、南北朝時代期の新羅の評価をめぐって、これを「後期新羅」と呼んで国土南部の統合とのみ見

て民族統一とは見ない北朝鮮の見方と、これを「統一新羅」と呼んでこれは民族の不完全統一であり、高麗がその不完全性を補ったとする韓国の見方とに分かれる。³²一方中国では、渤海は現中国を構成する一民族たる満族の先祖で、唐代の少数民族だった靺鞨族が建てた、唐王朝統轄下の一地方封建政権という公式見解のもと、中国東北史や満族史の中に位置づけ、朝鮮史との関係を排除しようとしている。³³

一九九〇年代の日本の渤海史研究は、どちらの研究に対しても、現代の政治的要求を歴史に反映したものとして批判的である。³⁴つまり、韓国・北朝鮮の「南北朝時代」論には南北分断状況の克服という課題が、中国の「唐代の少数民族による一地方政権」論には少数民族の国家への統合の問題が、それぞれの論の背景に存在すると見るのである。それ故、日本における渤海史研究の問題関心は、関連諸国家による渤海史の「争奪」という現実をいかに乗り越えるか、という方向に動いている。この動きは、現在の日本の歴史学が、近代国民国家が生み出した「歴史物語」自体を分析対象とし、そこに現実の投影を見いだし、実証研究の成果を踏まえてそれを解体していかうとしていることも、密接に関連する。³⁵そして研究動向を概括的に捉えるならば、支配方法や支配者の意識に迫る研究を蓄積し、東北アジア・環日本海という広範な地域の視野から新たな渤海像を

構築しようと模索しているといつてよからう。³⁶

さて、広範な地域から渤海を見ようとするとき、同時期に朝鮮半島の大半を占めた新羅をどう見るかが重要な問題となる。特に留意すべきは、我々がこれを「統一新羅」と呼んでいることである。そこには、高句麗・百濟・新羅を「朝鮮三国」と呼んで、既に「朝鮮」という世界が存在し、そこに分立した三国を新羅が「統一」したという、無前提の歴史認識が存在する。しかし、果たしてこの歴史認識は本当に自明のことなのだろうか。この歴史認識が、現在の国家・民族を過去に投影したものではないと言い切れるだろうか。そして当時の人々もこの歴史認識を持っていたのだろうか。

本稿は、この疑問から出発し、当時の「統一新羅」と渤海の人々がそれぞれ、自らの国家をいかなる世界を受け継ぎ統合した国家と認識し（これを本稿では統合意識と呼ぶ）、どこまでを自らの世界と認識していたか（これを本稿では境域観と呼ぶ）を検討するものである。そしてそのことで、「統一新羅」と渤海の歴史を、近代国家の枠組みを前提とした「歴史物語」の文脈から解放し、歴史自体の文脈の中で捉えるための手がかりを得たいと思う。

なお本稿では、七世紀後半以降の新羅を「統一新羅」といわず「後期新羅」と表現する。なぜなら、本稿は新羅が三国を統一した国家かどうか自体を再検討するので、無前提に統一を意味してしま

うこの用語は使えないと考えたからである。ただし、これに代えて使う「後期新羅」という用語も、先述のように北朝鮮で使用されて一定の意味内容が付加されているため、問題は残る。しかし、これ以外に七世紀以前と以降とを区別する妥当な用語が見当たらないので、北朝鮮の歴史認識を継承するものではないことをここに明記して使用することとしたい。

二、後期新羅の統合意識と境域観

(1) 後期新羅の北境観

まずは後期新羅の境域観、特にその北境観から検討していきたい。そのためにはその領域拡大過程を確認する必要がある、表1は『三国史記』をもとにそれを整理した年表である。ここから後期新羅の領域拡大過程を概観すると次のようになる。

六七〇・六八〇年代―旧百濟領の領有と地方制度の整備

六九〇年代―臨津江以北・礼成江以南の旧高句麗領への北進開始

始

七〇〇～七二〇年代―北進の停滯

七三〇年代―対渤海戦争を契機とする唐の涇江（＝大同江）以

南領有承認と北進の再開

七四〇～八二〇年代―礼成江以北・涇江以南の旧高句麗領の郡県化と軍鎮設置^③

このように見てくると、後期新羅は八二〇年代まで北に向かって拡大し続けていたように思えるが、注意したいのはその拡大のほとんどが西北境方面であって、東北境は六七五年以降わずかに北進しただけでほとんど変わっていないという事実である。つまり、東北境方面の地名として登場する井泉郡・朔庭郡はいずれも元山・安辺付近に比定され、また六七五年に閔城が置かれた安北河は徳原の北面川に、七二一年に築かれた長城は永興付近に比定されており、東北境は永興湾の南から北に若干北進しただけで、大きく動くことはなかったのである。後期新羅の領域拡大の北限は、西北においては涇江、東北においては永興湾なのである。

では、なぜこの両者が北限だったのか。これに関連して重要なのが、次に掲げる『三国史記』巻七・新羅本紀・文武王一一（六七二）年条の、文武王が唐将薛仁貴に送った報書である（傍線・記号及び括弧は筆者）。

大王報書云、「先王貞觀二十二年入朝、面奉太宗文皇帝恩勅、

『朕今伐高麗、非有他故、憐你新羅、懼乎兩國、每被侵陵、靡有寧歲、山川土地、我非所貪、玉帛子女、是我所有、我平定兩

表1 後期新羅の領域拡大過程年表

六六〇	百済を唐とともに滅ぼす。唐はその故地に熊津都督府を設置。	六七九	使を發して耽羅國を略す。
六六三	唐、新羅を鷄林大都督府にする。唐・新羅、白江で倭・百済連合軍を破り、百済復興運動崩壊。	六八一	井泉郡を取る。
六六四	唐、元百済王扶余隆を熊津都督に任命してその故地に帰し、新羅と会盟させる。	六八三	報徳王安勝を召し、金姓・官位を賜いて京師に留め、報徳國滅亡。
六六五	唐、新羅の文武王と扶余隆を再び会盟させる。	六八四	報徳國遺民、反乱を起こすも、平定される。
六六八	高句麗を唐とともに滅ぼす。唐はその故地に安東都護府を設置。	六八五	百済故地に完山州(≡全州)を復置し、九州成立。
六六九	唐に謝罪使を派遣。	六八六	高句麗人に京位を授ける。
六七〇	唐、新羅が百済の土地・遺民を取るを怒りて謝罪使の一部を留め置く。旧百済領に侵攻(≡七二連年侵攻)。高句麗の嗣子安勝を金馬渚(旧百済領)に置いて高句麗王に冊封する。	六九〇	三辺守幢を北辺に設置。
六七一	所夫里州(≡熊州)設置。唐、新羅問罪のために薛仁貴らの軍を派遣。薛仁貴、文武王と書簡をやりとりする。	六九四	松嶽・牛岑二城築城。
六七二	扶余隆、熊津都督府を放棄して唐に撤退。	六九二—七〇二	この間に朔庭郡築城。
六七三	唐に謝罪使を派遣。	七二三	開城築城。
六七四	百済人に内外位を授ける。	七二八	漢山州管内の諸城築城。
六七五	安勝を改めて報徳王に冊封。唐、文武王の官爵を剝奪し、新羅征討軍を派遣。外位を廃止し、官位制を京位に一本化。	七二一	何瑟羅道の丁夫二千を徵發して長城を北境に築く。
六七六	唐に謝罪使を派遣し、唐は新羅の官爵を復歸する。安北河(≡今の咸鏡南道徳原の北面川)に関城を設ける。	七三三	前年、渤海が唐の登州に侵攻したため、唐・新羅連合軍が、渤海の南境に侵攻するも、大雪のため敗退。
六七七	唐、安東都護府と熊津都督府を遼東に移転。	七三五	唐、新羅に「涇江置戍」を許可し、涇江以南の地を割譲。
六七八	阿湊天訓を武珍州都督に任命(≡武珍州[≡武州]設置)。唐、新羅征討計画を立てるも、中止。	七三六	使臣を派遣し、平壤州(≡漢州)・牛頭州(≡朔州)の地勢を檢察せしむ。
		七四八	北辺を檢察して、大谷等十郡県を設置。
		七六二	五谷・鶴巖・漢城・獐塞・池城・徳谷六城を築き、太守を置く。
		七八一	涇江以南州郡を安撫する。
		七八二	宣徳王、漢山州に巡幸し、民戸を涇江鎮に移す。大谷鎮設置。
		七八三	阿湊休信を大谷鎮軍主にする。
		八二六	牛岑太守に命じて、漢山北諸州郡の人一万を徵して、涇江長城三百里を築く。この頃、取城郡等四郡県を設置。

國、平壤已南、百濟土地、並乞你新羅、永爲安逸。」(略)、遂破平壤、克成大功。於此新羅兵士並云、『自征伐已經九年、人力殫盡、終始平兩國、累代長望、今日乃成。必當國蒙盡忠之恩、人受効力之賞。』英公漏云、『新羅前失軍期、亦須計定。』新羅兵士得聞此語、更增怕懼。(略)。又卑列之城、本是新羅、高麗打得三十餘年、新羅還得此城、移配百姓、置官守捉、又取此城還與高麗。且新羅自平百濟、迄定高麗、盡忠効力、不負國家、未知何罪、一朝遺棄、雖有如此冤枉、終無反叛之心。(略)、至(咸亨元年(六七〇)年)七月、入朝使金欽純等至、將畫界地、案圖披檢百濟舊地、摠令割還。舊河未帶、太山未礪、三四年間、一與一奪、新羅百姓、皆失本望、並云、『新羅百濟、累代深讐、今見百濟形況、別當自立一國、百年已後、子孫必見吞滅。』新羅既是國家之州、不可分爲兩國、願爲一家、長無後患。去年九月、具錄事狀、發使奏聞。(以下略)』

この報書は、新羅が、百濟・高句麗滅亡後に唐領となった地域への侵攻の正当性を、唐に対して主張したものである。旧百濟領と平壤以南の旧高句麗領への侵攻は唐太宗の勅書の傍線部aが根拠である。一方、日本海側に関しては傍線部bが根拠になる。傍線部bの「卑列」は「比列」の異表記で、「卑列之城」とは高句麗の比列忽郡のことであり、新羅では朔庭郡である。傍線部bは、朔庭がもとも

と新羅の土地であったことを根拠に、日本海側での旧高句麗領への侵攻の正当性を主張した部分なのである。このように主張した以上、朔庭付近がその侵攻の北限として設定されていることはいうまでもない。さすれば、この報書で新羅が自己の領有権を主張した範囲は平壤から朔庭までのラインより南であり、平壤の南を流れる浪江から朔庭のすぐ北の永興灣までのラインという後期新羅の実際の北限と、ほぼ一致するのである。

後期新羅の領域が六七〇年代に対外的に主張した北境を越えなかったという事実は、新羅国家がこの北境を自己の世界の境界と考えていた可能性を示唆する。しかし、そう言い切るにはさらに別角度からの検討が必要である。その検討の手がかりとなるのが、長城である。長城は外部勢力の侵入に対する防御施設であるが、これは言い換えれば、その内外を別世界として区別する境界を設定し、内部を長城建設者が守るべき自己の世界と認識していること、そしてそれを可視的に内外に表明したことを意味する。さすれば、東北境・西北境に長城が存在したことの意味は重要である。

東北境に長城が建設されたのは七二一年のこと、かつて論じたように渤海の南進によって生じた軍事的緊張に対応したものである。これを先述の長城理解に沿って読み替えるならば、自己の守るべき東北境を確定し内外に表明したものと位置づけることができる。既

に李成市氏による『新唐書』新羅伝長人記事の分析によって、八世紀中期以前に長城以北を異人の住む異域とする意識が新羅人に存在していたことが明らかにされており、この長城を新羅人が自己の世界の境界と認識していたことは確実である。ただし、この長城には既に前身的施設として、近くに関城という軍事施設が六七五年に建設されていた。諸史料に見える「鉄關」関門「鉄関城」「鉄城」はこの別称と考えられており、その名称から長城のようにその内外を区別する関所の施設であったことは間違いなく、七世紀後半に既に東北境では領域確定がなされていた。李成市氏は長城以北を異域とする新羅人の心性が生まれる背景として渤海との緊張関係を強調するが、六七五年以来の境界の設定とそれに伴う交通の制限の方が大きな要因かもしれない。

一方、西北境の涓江沿いに長城が建設されたのは八二六年のこと、渤海第一〇代宣王大仁秀の新羅侵攻に対応すべく建設されたとの見解が既に示されている。¹⁸これも先のように読み替えるならば、自己の守るべき西北境を確定し、可視化して内外に表明したものと意味づけられる。ただし、涓江地方は渤海との対峙地域ではあるが、東北境と違って直接には境界を接しておらず、後述するように一定の緩衝地帯が存在した。にもかかわらず長城が築かれたのだから、そこには防衛以外の意味もあったと見るべきである。涓江地方は、

七三五年の唐の涓江以南割譲以降、次第に新羅領となっていたフロンティアで、新羅の勢力が涓江まで浸透してその南岸地域に郡県が設置されたのは八二〇年代頃だから、長城建設はこれとも対応する。それ以前の実質的境界は涓江以南だったが、涓江が勢力浸透のゴールとして設定されたという意味では、そこは新羅国家の潜在觀念的な境界線だったともいえる。それ故にこそ、涓江地方のフロンティアが消滅して新羅領編入が確定したことを内外に表明するために、長城建設という境界の可視化が行われ、觀念から実質への転換を象徴的に表現したと見ることもできるのである。¹⁹

以上の考察から、後期新羅国家は、六七〇年代に涓江―永興灣ラインを北境とする認識を内外に示して以降、九世紀に至るまで、その北境観を基本的に変化させておらず、このライン以南こそが新羅の完結した世界という認識を持っていたと結論づけられる。

このことは、言い換えれば、後期新羅は平壤・集安というその中心地域を含む高句麗の北四分の三を自己の領域と認識していなかったということでもある。確かに先掲の文武王の報書を読むと、傍線部 a・c に見えるように、百濟領の領有・統合は対外的に主張しているが、全高句麗領や高句麗中心地域の領有は全く主張していない。そして中国史料・日本史料のどちらにも、新羅が高句麗を統合したという同時代史料は存在しないのである。では、後期新羅には高句

麗を統合する、あるいは統合したという意識が全くなかったのだらうか。節を改めて、この問題を考えてみたい。

(2) 後期新羅における「三国一統」意識の成立

後期新羅が高句麗を統合したという意識とは、百濟領が実際に新羅に統合されているから、後期新羅が新羅・高句麗・百濟の三国を一つにしたという意識と言い換えられる。この意識を本稿では「三国一統」意識と呼んでおく。この「三国一統」意識の存在を、まずは後期新羅の歴史を記す『三国史記』から検討したい。ただし『三国史記』のような歴史編纂物に現れる人々の意識を検討する場合、編者の意識とそこに書かれた時代の人々の意識とを区別する必要がある。そこで作業の都合上、編者の意識から先に確認したい。

『三国史記』は、書名からも、新羅・高句麗・百濟の三国全てを本紀としている点からも、高麗が三国全てを継承したという立場に立っていることは明確である。そしてこの三国を後期新羅が統一したと認識していることは、『三国史記』巻四三・金庾信伝下の論に

觀夫新羅之待庾信也、親近而無間、委任而不貳、謀行言聽、不使怨乎不以、可謂得六五童蒙之吉。故庾信得以行其志、與上國協謀、合三土爲一家、能以功名終焉

とあることから明らかである。また、編者金富弼の「進三国史表」

の

況惟新羅氏・高句麗氏・百濟氏、開基鼎峙、能以禮通於中國。や、『三国史記』巻二九・年表上・序文の

海東有國家久矣。自箕子受封於周室、衛滿僭號於漢初、年代綿邈、文字疎略、固莫得而詳焉。至於三国鼎峙、則傳世尤多。

に見える「鼎峙」という表現も、「三国一統」意識を明示している。鼎は一つの本体に三つの足があるため、「鼎峙」「鼎立」は本来一体の世界が三つに分かれている状態を表現するものだからである。この表現によって、三国は自明の一体世界と認識されていることがわかるのであり、だからこそ新羅による「吞滅」ではなく「一統」なのである。これが『三国史記』編者の認識であり、おそらく一二世紀高麗時代の人々の認識である。

次に、新羅時代の人々の認識を『三国史記』から見つけだしてみよう。編者の執筆になる序や論以外の諸記事を見ていくと、新羅の「三韓一統」「三国一統」を明示するものが三つ見つかる。一つ目は、巻八・新羅本紀・神文王一二(六九二)年春条の

唐中宗遣使口勅曰、「我太宗文皇帝、神功聖德、超出千古、故上僊之日、廟號太宗。汝國先王金春秋、與之同號、尤爲僭越、須急改稱。」王與羣臣同議、對曰、「小國先王春秋諡號、偶與聖祖廟號相犯、勅令改之、臣敢不惟命是從。然念先王春秋、頗有

賢徳、況生前得良臣金庾信、同心爲政、一統三韓。其爲功業、不爲不多。捐館之際、一國臣民、不勝哀慕、追尊之號、不覺與聖祖相犯。今聞教勅、不勝恐懼。伏望使臣復命闕廷、以此上聞。」後更無別勅。

二つ目は、卷四一・金庾信伝上の

眞平王建福二十八年辛未、公年十七歲、見高句麗・百濟・靺鞨侵軼國疆、慷慨有平寇賊之志、獨行人中嶽石峯、齊戒告天盟誓曰、(略)、忽有一老人、被褐而來、(略)、老人乃言曰、「子幼而有并三國之心、不亦壯乎。」

三つ目は、卷四三・金庾信伝下の

咸寧四年癸酉、是文武大王十三年、(略)、夏六月、人或見戎服持兵器數十人、自庾信宅泣而去、俄而不見。庾信聞之曰、「此必陰兵護我者、見我福盡、是以去、吾其死矣。」後旬有餘日寢疾。大王親臨慰問、庾信曰、(略)、大王泣曰、「寡人之有卿、如魚有水。若有不可諱、其如人民何、其如社稷何。」庾信對曰、「臣愚不肖、豈能有益於國家。所幸者、明上用之不疑、任之勿貳、故得攀附王明、成尺寸功、三韓爲一家、百姓無二心、雖未至太平、亦可謂小康。(略)、則臣死且無憾。」王泣而受之。至秋七月一日、薨于私第之正寢、享年七十有九。

である。しかしその原史料を考えると、後二者は明らかに金庾信伝

説からの記事であり、最初の記事も、繫年に問題があることや『三國遺事』卷一・紀異・太宗春秋公にほぼ同内容の金庾信伝説があることから、この伝説に基づくという指摘をかつて筆者自身が行っている⁽²⁰⁾。結局全て金庾信伝説からの記事であり、金庾信の生きていた七世紀後半の認識を伝えるものではない。この伝説の成立期がいつかは確定できておらず、伝説中の「三國一統」意識がいつに始まるかを明らかにすることは今のところできない。

一方、金庾信の生きていた当時の文章をほぼそのまま伝えているものとして、新羅本紀に見える教や遺詔がある。卷六・文武王九(六六九)年二月二日条には、高句麗平定直後に群臣に下された文武王の教があり、

往者新羅、隔於兩國、北伐西侵、暫無寧歲、戰士曝骨積於原野、身首分於庭界。先王愍百姓之殘害、忘千乘之貴重、越海入朝、請兵絳闕、本欲平定兩國、永無戰鬪、雪累代之深讎、全百姓之殘命。百濟雖平、高句麗未滅、寡人承克定之遺業、終已成之先志。今兩敵既平、四隅靜泰、臨陣立功者、並已酬賞、戰死幽魂者、追以冥資。但囹圄之中、不被泣辜之恩、枷鎖之苦、未蒙更新之澤、言念此事、寢食未安、可赦國內。

と述べる⁽²¹⁾。また卷七・文武王二一(六八二)年七月一日条には、文武王薨去記事に続けてその遺詔があり、

寡人運屬紛紜、時當爭戰、西征北討、克定疆封、伐叛招携、事寧遐邇。上慰宗祧之遺顧、下報父子之宿冤、追賞遍於存亡、疏爵均於内外、鑄兵戈爲農器、驅黎元於仁壽、薄賦省徭、家給人足、民間安堵、域内無虞、倉廩積於丘山、囹圄成於茂草、可謂無愧於幽顯、無負於士人。

と述べる。どちらも高句麗・百濟平定の正当性を「累代の深讐を雪ぎ、百姓の残命を全くする」ことや「宗祧の遺顧を慰め」「父子の宿冤に報いる」ことに求めており、「三国一統」に求めていない。このことは、高句麗・百濟平定当時において、これを「三国一統」目的とする認識がなかった可能性を示唆する。

文言からではなかなか見つからないので、目を『三国史記』が伝える統一新羅の政策に転じると、『三国一統』意識を象徴的に示したと解釈できるものが一つ見つかった。地理志に見える、九州の三国故地への均等配分が、それである。後期新羅は六八五年に全国を九州に分ける地方制度を成立させるが、それらは新羅・高句麗・百濟の各故地に三州ずつ均等に設置されたことになっている。この均等配分が事実どおりならば表象的とはいえないが、高句麗故地に配分された北部日本海岸地域は早くより新羅領で、前節で見たとおり新羅自身が本来の領域と対外的にも表明していた地域である。これをあえて高句麗領と位置づけ、わざわざ均等配分したとすれば、そ

こに新羅国家のメッセージがあるはずであり、それは「三国一統」国家新羅の表明と解しうるのである。

しかし、この表明が六八五年当時からなされていたとすることはできない。なぜなら、地理志は『三国史記』編者による編纂物であって、本紀等の史料でこの事実を裏付けられないからである。²²そしてたとえ編者が後期新羅の認識に基づいて配分したとしても、それがいつの時点かは確認できず、今のところ七世紀までこの認識が遡れる確証はないのである。²³

このように見てくると、『三国史記』から後期新羅における「三国一統」意識の存在を証明するのは難しいといえる。そこで別の方法として浮かび上がるのが、後期新羅時代の金石文である。管見の限り、『三国一統』意識を確認できる碑文は四点存在する。それを碑文の作成年次を付記して列挙すると、次のとおりである。

①「韓鼎足之代、百濟國獻王太（以下欠）」「金立之撰聖住寺事蹟碑片」の第四石と第三石、八三九〜五七年²⁴

②果合三韓、以為「家」。「皇龍寺九層木塔刹柱本記」の第二板内面第三行、咸通一三（八七二）年²⁵

③我太宗大王、痛黔黎之塗□、□□海之□□、□戈三韓之年、垂衣一統之日。「忠州月光寺圓朗禪師大寶禪光塔碑」、龍紀一（八九〇）年²⁶

④昔之叢爾三國、今也壯哉一家。「開慶鳳巖寺智證大師寂照塔碑」、龍德四(九二四)年²⁷

②③④から新羅の「三國一統」意識は確実に読みとれるが、①の「鼎足」に見える三國一体世界意識からも「三國一統」意識の存在を推定してよいことは、先述のとおりである。新羅の「三國一統」意識は遅くとも九世紀半ばには確立していたのである。しかし、それ以前の金石文では、たとえ文武王の功績を述べても「三國一統」的表現は存在しない²⁸。従って現在のところ、七・八世紀の新羅に「三國一統」意識が存在したことを史料的には確認できないのである。

ところで、九世紀新羅の「三國一統」意識との関係で注目すべき史料として、『三國史記』卷四六・崔致遠伝にある「上大師侍中状」(九世紀末)の

伏聞、東海之外有三國、其名馬韓・卞韓・辰韓、馬韓則高麗、
卞韓則百濟、辰韓則新羅也。

がある。ここには、馬韓＝高句麗、弁韓＝百濟、辰韓＝新羅という三韓と三國の一对一对の歴史認識が見える。しかし実際には、高句麗は韓族と関係なく、百濟も馬韓中の一国が成長したものだから、この対応が事実と異なることはいうまでもない。つまり、この歴史認識とは、本来は別系統の種族である高句麗を三韓に入れて、新羅・

百濟と同じ韓族と見なす虚構の同族意識なのである。

崔致遠がこうした意識を表明し得た背景には、三國人の融合が進んで後期新羅の人々の間に自分たちを一つの種族とする意識が生まれ、三韓＝三國説が存在していたと考えてよからう²⁹。そして、こうした同族意識が一般化していたとすれば、新羅による三國統合という歴史認識は自明の前提だったと考えられる。とすれば、「三國一統」意識がいつ頃確立したかは、後期新羅が新来の諸種族をどのように統合し融合させていったかを検討する中で、ある程度明らかにできるのではなからうか。そこで節を改め、その検討を試みたい。

(3) 後期新羅の三國統合政策と「三國一統」意識の成立

後期新羅が百濟人・高句麗人をどのように統合・融合させたかを検討する前に、後期新羅成立以前に三國を一体世界として捉える見方が存在していたか否かを確認しておきたい。

七世紀に三國を一つにまとめた表現として『海東三國』や『三韓』が存在したことは、唐側の諸史料に散見する。例えば、『旧唐書』卷一九九上・百濟伝に見える永徽二(六五二)年に唐の高宗が百濟王に出した璽書には、

至如海東三國、開基自久、並列疆界、地實犬牙。近代已來、遂構嫌隙、戰爭交起、略無寧歲。遂令三韓之氓、命懸刀俎、尋戈

肆愼、朝夕相仍。

とある。しかし、ここから唐が三国を一体世界と認識していたという結論は導けない。なぜなら、「海東三国」という表現からだけでは「海東地域」の三つの国」以上の意味を見つけられず、「海北諸部」「南海諸国」などと同レベルの表現としかいえないからであり、また「三韓」も、九世紀のような三国との具体的な一対一対応はなく、その数と存在地域の同方向性から東方の三国をかつての三韓になぞらえたという解釈以上に踏み込めないからである。また、顕慶五(六六〇)年に作成された『唐平百濟碑』³⁰は、百濟平定だけをもつて「一舉而平九種、再捷而定三韓」と表現するが、これなどはこの方面を「三韓」と表現しただけで、三国との対応すら見いだせない。「海東三国」も「三韓」も、この時点ではあくまで抗争する三国地域一帯をまとめていう表現で、既に三国が実態として一体世界であったことを示すものではないのである。ただし、こうした表現が存在したこと自体は重要で、抗争によって生じる三国の密接な交流と合わせて、一体認識を生み出す一要因となったと思われる。

この前提に立って、本題の検討に戻ろう。後期新羅成立期において、新羅が新領域の諸種族を統合していくために採った政策として注目されるのは、新来者への官位授与と外位廃止、報徳国の併合、九誓幢の完成の三点である。順次それらの持つ意味を検討したい。

新羅は元来、王京人に与える京位とそれ以外に与える外位の二重官位制をとっており、外位は最高位の嶽干でも京位第七等の一吉凜にしか該当しないという、王京と地方を明確に差別する体制をとっていた。相次ぐ百濟人の帰属と高句麗人の流入は、新羅に彼らの処遇をめぐるこの体制を維持するか否かという課題を提起した。六七三年に行われた帰属百濟官人への官位授与は、達率という百濟の最高官位だった者でも、京位第一〇等の大奈麻か外位第三等の貴干しか与えないという、極めて差別的なものであった。³¹さらにいえば、京位は王京人に与えるのが本来だから、これを得た者は少なく、外位を得た者が大半であったと推測される。ところが翌六七四年、新羅は外位を廃止し、官位制を京位のみに一本化する。³²これは、王京とそれ以外という地域格差を制度上から廃止したということであり、その領域内の人々を一元的に把握しようとした政策と理解できる。先に外位を得た新来百濟人もこれによって京位に位置づいたはずである。そして、六八六年に行われた新来高句麗人への官位授与は、京位第七等の一吉凜を最高位とするものとなっており、³³先の百濟の場合よりも厚遇されている。

新来種族の統合政策という視点で見ると、六七四年における外位の廃止は重要な転換点といえる。これが王京と地方の平等を単純に意味しなかったことは、王京人の特権的地位が骨品制という族制

的身分制の形でその後も継続していったことから明らかである。しかし、王京と地方を峻別する両輪として機能していた二元的官位制という個的身分制を、京位を地方に開放して一元化したことは、それだけで大きな変革であり、新来種族を平等に包含した国家建設という理念の表明とはなっただけである。この表明が必要となった背景には、同年の唐の進攻に対し、旧百濟領などの地方豪族を味方に付け、新来者を含めて新羅が一体となって戦わなければならないという状況があったと思われる。六八六年の新来高句麗人への授与官位の上昇は、この路線の継続を意味しよう。つまり、後期新羅が王京と地方という二元的体制を転換し、三国統合国家建設を表明した。その制度的・理念的転換点が、外位廢止と考えられるのである。

また、新来者への官位授与がもとの国の官位に準拠したことも注意すべきである。なぜなら、新羅が百濟・高句麗の官位自体を認め、それを自国の官位に読み替えることで、両者に連続性が生まれるからである。新羅が滅亡した百濟・高句麗を継承したことが、これによって示されてもいる。

次に報德國の併合過程を検討する。⁽³⁴⁾新羅の支援を受けて唐に反旗を翻していた高句麗王族の安勝が、敗れて新羅に逃げ込んできたのは、六七〇年である。新羅はこの新来高句麗人集団を旧百濟領の金馬渚に安置し、安勝を高句麗国王に冊封した。形は高句麗復興でも、

実際は新羅の手によって、その臣下として、その国内に復興したものである。これ自体高句麗の新羅内国化といえるが、それをさらに一歩進めたのが、六七四年九月の安勝の報德王への再冊封である。報德王とは、唐が友好関係を持ったり友好関係維持を期待した周辺諸国に儀礼的・名目的な意味で与えた「德化王」⁽³⁵⁾に該当するものと考えられる。六七四年が唐軍来襲の時に当たることを考えれば、再興の德に報いてともに唐と戦うことを期待して報德王冊封があったと見るべきで、先述した新来者との一体化路線の一環と位置づけることができる。

報德國は高句麗人流入の受け皿として機能したと見られるが、本来百濟領の吸収を意図していた新羅がいつまでもそこに別の国家を抱えておくことはできなかったはずである。六八〇年三月、新羅は安勝に文武王の妹を娶せ、高句麗王家と新羅王家の結合を計る。これは高句麗王家吸収の布石と見てよく、この前提に立って新羅は、六八三年一〇月、安勝に蘇判（京位第三等）を授け、王姓である金姓を賜い、王京に居住させた。高句麗王家の新羅貴族化である。翌年、これに反対する報德國遺民は反乱を起こすが、平定され、国南の州郡に徙民させられた。こうして新来の高句麗人が新羅に完全吸収されたのである。この過程のうち、高句麗王家の新羅貴族への吸収は特に重要である。なぜなら、自国の貴族としてその王統を維持

させていくことが、新羅が高句麗を単に滅ぼしたのではなく、その世界を統合したことを意味するからである。新羅は領域的には高句麗の統合を主張しなかったが、王統という点では高句麗世界の統合が行われたのである。³⁶⁾

次に六九三年の九誓幢完成の持つ意味を検討する。九誓幢は王都に置かれた軍団で、表2に示したごとく、五八三年以来、順次整備されていったものである。³⁶⁾ 最初から九になるはずではなかったが、

途中から王軍＝九軍という中国の理念を背景として、九に揃える方向で整備されたと考えられる。整備過程で注目すべきは、六七二年に百濟人で白衿誓幢を作って以降、新来諸族による誓幢が次々と作られた点である。そこに彼らの服属との密接な関係を読みとることは容易で、報徳城民による二つの誓幢が反乱平定から二年経った六八六年に作られたことは、それを端的に物語る。

王都にこうした新来諸族の軍団が置かれたことの意味は重要で

表2 九誓幢一覧(『三國史記』卷四〇・職官志下・武官による)

軍団名	構成種族	設置年次	沿革
緑衿誓幢	新羅人	真平王 五(五八三)	初名は誓幢。真平王三五(六一三)年改名
紫衿誓幢	新羅人	真平王四七(六二五)	初名は郎幢。文武王一七(六七七)年改名
白衿誓幢	百濟民	文武王一二(六七二)	
緋衿誓幢	新羅人	文武王一二(六七二)	初名は長槍幢。孝昭王二(六九三)年改名
黄衿誓幢	高句麗民	神文王 三(六八三)	
黒衿誓幢	靺鞨国民	神文王 三(六八三)	
碧衿誓幢	報徳城民	神文王 六(六八六)	
赤衿誓幢	報徳城民	神文王 六(六八六)	
青衿誓幢	百濟殘民	神文王 七(六八七)	

ある。つまり、王都という狭い空間に領域内の種族状況が再現され、かれらが新羅国王を取り囲むことによって、彼らの統合者としての国王の存在が浮かび上がる仕組みになるからである。また、かれらは新羅王の巡行などの警備を行うことになるが、そうした行列が人々の目に触れることにより、諸種族統合者としての新羅王が可視化されることにもなった。新羅国内に居住する新来諸種族を安定的に統治するためには、新羅が彼らをも包含する統合国家であることを、表象的・可視的に表現する必要があったと思われるが、その機能を有していたのが九誓幢だったのである。

このように諸種族統合の表象として九誓幢を見たとき、その新来種族の中に靺鞨人が入っていることは、大変興味深い。なぜなら、七世紀後期の統合対象は領域内の全種族であって、高句麗人・百濟人といった三国の民に限られていないからである。九世紀の段階で確認できた「三国一統」意識では、それが三国人の同族意識へと熟成するように、三国外の靺鞨人は統合の対象からはずれていた。靺鞨人は後期新羅において融合の対象とはならず、異族化していったのである。この間の変化が何によるかは明確にできないが、民族意識が他者との関係の中で生み出されるものとするならば、靺鞨とも称される渤海の登場がこの変化と関係することは間違いないだろう。

本節の考察から「三国一統」意識の成立過程は次のように考えら

れる。七世紀においては、三国が一体世界であるという認識の存在を確認できないが、「海東三国」「三韓」という三国地域をひとまとめにした表現が存在し、これらは一体意識の萌芽となるものだったと考えられる。七世紀後半、百濟・高句麗が滅亡し新羅がそこにいた諸種族を領域内に抱え込むことになると、新羅は彼らを統合するために、唐軍進攻の圧力を背景に、王京と地方を峻別してきた二元的な官位制を一元化してそこに位置づけた。この時、百濟・高句麗というもとの国家の官位を基準に新羅の官位が与えられたことで、百濟・高句麗と後期新羅の間には継承関係が生まれることになった。また報徳国の吸収も高句麗の統合と認識できる事件であった。領域的には高句麗を統合していないが、官位の継承・王統の吸収という点で高句麗の統合が行われたともいえるのである。「三国一統」意識の生まれるべき条件は、七世紀後半には既に出揃っていたといえる。ただし、この段階では靺鞨人が統合の対象として含まれており、「四族統合」意識が生まれても不思議はない状況であった。この錯綜した状況が整理され、「三国一統」意識に固まっていくのは、靺鞨が統合の対象からはずれていく時期であろう。それはおそらく、現在史料で確認できる九世紀半ばより早く、渤海の存在が対外的な脅威として強く認識された八世紀のことではなかったかと推測する。

最後に、以上述べてきた後期新羅の統合意識と境域観の関係を考察して、本章を締めくくりたい。後期新羅国家の境域観は、七世紀から九世紀に至るまで、俱江—永興灣ラインを北境として、それ以南を新羅の完結した世界とするものであった。そして実質領土も、この認識に沿って拡大・維持された。これに対し、後期新羅の統合意識は、百濟・高句麗を継承・統合するという「三国一統」意識であり、そこにある高句麗統合の意識は、官位・王統という点では実質性を持っていたが、境域観とは明らかに矛盾していた。

この関係を時系列的に見ていくと、まず新羅国家の境域観が六七〇年代初に確定した。同じ頃、唐軍来襲という非常事態を背景に、新羅は新来諸種族の統合をはかり、流入高句麗人については六八〇年代後半までにその吸収・統合を終える。この段階では新羅・百濟・高句麗・靺鞨の各種族が併存する状況にあったが、渤海の登場以降、三国人は融合へ、靺鞨人は異族へと分化し、ここに新羅の「三国一統」意識が確立する。これは実質性からいえば領域を含まない意識のはずだが、現に領域を持って存在した国家・種族の記憶は、境域観との混同を呼び起こしやすい。つまり、「三国一統」意識を持った八世紀以降の新羅人の境域観には、新羅国家の公式の境域観との間に、旧高句麗領をめぐって「ゆらぎ」とも呼ぶべき状況が生まれていたと推測されるのである。この「ゆらぎ」こそが、後期新羅の

世界内から生まれた勢力が、それを継承したままその世界を領域的に拡大することの正当性を導いたといえよう。高句麗継承を主張した弓裔や王建による平壤進出や、王氏高麗における北進策の展開などがそれである。さらにいえば、その後の大朝鮮主義につながる境域観の系譜をここに見ることもできよう。

三、渤海の統合意識と境域観

(1) 渤海の領域拡大過程と高句麗継承意識

本章では渤海の統合意識と境域観を検討するが、それと密接に関連するのが渤海の高句麗継承意識である。これについて述べる従来の研究は、その存在を指摘し、そこから朝鮮史への渤海の位置づけへとすぐに飛躍してしまうことが多く、この意識自体に分析のメスを入れることはほとんどなかった。高句麗継承意識の渤海国家における政治的機能、歴史的変遷、意識と実態との関係などといった視点は、欠けていたといつてよい。本章の検討は、この問題を考えるところからスタートしたい。そしてそれを考えるには、まず渤海の領域拡大過程を概述しておく必要がある³⁹。

六九八年に敦化に建国した渤海は、当初旧高句麗領に領域を拡大

し、高句麗人と南部靺鞨諸族を服属させ、七二〇年頃には東南の日本海岸で新羅と接触する一方、西南の鴨綠江方面ではそのルート確保に成功する。この渤海の初期領域には、その後五京となる地域がほとんど含まれており、この頃渤海の中心領域が確定したといえる。一方、七一九年に即位した第二代大武王は北方へも進出し、黒水靺鞨などの北部靺鞨諸族を圧迫し、これはやがて七三二―五年の唐との紛争へと発展した。しかし、渤海はこの間に北方進出の基盤を固めて北進策を継続し、七五〇年代前後には弘捏・鉄利、九世紀初までは越喜・眞婁をそれぞれ服属させて州県化した。この頃黒水も服属したが、ここは州県を置いて領域化するまでには至らなかった。ともかく、八一八年に即位した第一〇代大仁秀の時代に、渤海の版図は最大となった。『新唐書』卷二一九・北狄伝・渤海に見える五京一五府六二州の記事は、八三五年に渤海に使用して帰国した張建章の『渤海国記』によることが知られているが、これはこの最大版図を伝えるものといえる。

さて、まずこの最大版図と高句麗継承意識との関係を考えたい。最大版図の確認のため、五京一五府六二州の記事を引用する。

地有五京・十五府・六十二州。以肅慎故地爲上京、曰龍泉府、領龍・湖・渤三州、其南爲中京、曰顯德府、領盧・顯・鐵・湯・榮・興六州。獮貊故地爲東京、曰龍原府、亦曰柵城府、領慶・

鹽・穆・賁四州。沃沮故地爲南京、曰南海府、領沃・晴・椒三州。高麗故地爲西京、曰鴨渚府、領神・桓・豐・正四州、曰長嶺府、領瑕・河二州。扶餘故地爲扶餘府、常屯勁兵扞契丹、領扶・仙二州、鄭誦府領鄭・高一州。挹婁故地爲定理府、領定・潘二州、安邊府領安・瓊二州。率賓故地爲率賓府、領華・益・建三州。拂捏故地爲東平府、領伊・蒙・沱・黑・比五州。鐵利故地爲鐵利府、領廣・汾・蒲・海・義・歸六州。越喜故地爲懷遠府、領達・越・懷・紀・富・美・福・邪・芝九州、安遠府領寧・鄒・慕・常四州。又郭・銅・涑三州爲獨奏州。涑州以其近涑沫江、蓋所謂粟末水也。龍原東南瀕海、日本道也。南海、新羅道也。鴨渚、朝貢道也。長嶺、營州道也。扶餘、契丹道也。

この記事で注意されることは、鴨綠江河口や平壤に置かれたと見られる府州がないことである。八〇一年に成った『古今郡国県道四夷述』の四夷述部分を単行させたといわれる賈耽の『道里記』が『新唐書』卷四三下・地理志七下に引用されているが、ここでは鴨綠江河口や平壤は唐領で、渤海との境界は鴨綠江を少し越った泊汭口となっている⁽⁴⁾。この八〇一年と八三五年の間に渤海と新羅の戦争があり、涇江付近が戦場となった可能性⁽⁴⁾があるが、たとえそうであったとしても、渤海は鴨綠江河口から涇江までの地域を府州とする明確な領域化を行わなかったのである。その後もこの地域の領域化を

示す史料はなく、一〇世紀には弓裔や王建が平壤に進出し、また渤海と対峙していた契丹の耶律阿保機が鴨綠江に一時的に進軍したという記事もある^⑧。今ある材料から判断する限り、領域化はなかったと断じてよい。とすれば、渤海は高句麗の継承を騙っているにもかかわらず、旧高句麗領の全面確保には固執していないように見える。そこで改めて領域拡大の過程を整理してみると、建国当初は旧高句麗領を南進したが、七二〇年代を境に北進中心となっていることに気づく。この南進期、渤海は高句麗継承意識を前面に立てている。例えば、七二六年の第一回対日遣使が日本にもたらした国書には「復高麗之舊居、有扶餘之遺俗」とあり、夫余・高句麗の境域・伝統の継承が国家の正統性の主張のために前面に打ち出されている^⑨。ここに見えるのは、夫余・高句麗と続いてきた歴史的世界を受け継ぎ統合したという意識だから、本稿での用語に直すならば、高句麗世界の統合意識と呼び替えてもよい。また、皇太子が唐から冊封されたのが桂婁郡王であったことにも、高句麗五部の一つ桂婁を皇太子の冊封号に冠することにその地位保全上の意味を読み取ることは可能で、渤海において高句麗との関係が国家の正統性を保証する重要な権威となっていたことを確認できる。

ところが、七二八年に皇太子大都利行が唐で客死すると、それ以降皇太子への桂婁郡王冊封はなくなってしまう^⑩。このことは唐によ

る権威付けから脱却して渤海王の権威のみで皇太子の地位を保証するようになったことを意味するが、高句麗との関連要素も消えており、王権の高句麗的権威からの脱却としても機能したと考えられる。また、八世紀半ばの一時期に日本に対して「高麗国王」を名乗るが、これは単純な高句麗継承意識の表明ではなく、かつての「朝貢国」高句麗の復活として渤海を位置づけようとする日本の対外政策への迎合であることが、石井正敏氏によって指摘されている^⑪。高句麗継承を対外的に主張することの意味が変化したのである。これらのことは、高句麗の権威が建国当初より後退していることの現れと思われる。

ここで再度領域拡大過程と最大版図に注意すると、変化が見え出す七二〇年代以降、渤海が拡大を指向し領域化していった地域が、高句麗に服属していなかった北部靺鞨諸族の地であることに気づく。渤海の最大版図というのは、かつての高句麗領より大幅に北方にズレているのである。このような領域拡大をし、新領土を統合するとき、果たして高句麗の権威や高句麗世界統合意識は有効だったであろうか。別の権威や統合意識が必要とされたのではなからうか。節を改めて、この問題を検討してみよう。

(2) 渤海の「北方東夷」諸族統合意識

先述した『三国史記』地理志に見える新羅九州の三国故地への均等配分の分析からも明らかのように、国家が領域内の各地に示した歴史認識には、往々にしてその国家の統合意識や境域観が現れている。そのような目で、前節に掲げた五京一五府六二州の記事を見ると、「某某故地」という形で全領域を地域区分している点が注目される。

この「某某故地」の配列は、「扶餘故地」と「挹婁（虞婁）故地」の間を境にして、前の故地には渤海の領域内に居た諸種族の先祖と見られる「北方東夷」諸族の名が、後ろの故地には新規服属の北部靺鞨諸族の名が、それぞれ冠せられている。そして「北方東夷」諸族名が冠せられた故地は、全て渤海の初期領域＝中心地域である。重要なことは、中心地域においては、故地の場所と故地に冠せられた種族がかつて実際に居た地域とが完全には一致しないことである。つまり、獺貊と沃沮の場所は『三国志』東夷伝と逆になっており、肅慎故地にはその住地とは見られない中京の地が含まれているのである。この史実との乖離から、故地配分に諸族統合の表象としての意味合いを読みとるのは、難しいことではない。

その中でも注意すべきは、渤海の最重要地域である王都上京竜泉府からかつて王都があったとされる中京顯徳府の一带が「肅慎故地」に配分されていることである。^③ 肅慎についての当時の人々の歴史認

識は、八〇一年に成った『通典』の卷一八五・邊防典一・東夷上・序略の次の記事が最も端的に示している。

古之肅慎、宜即魏時挹婁、自周初貢格矢・石磬、至魏常道郷公末・東晉元帝初及石季龍時始皆獻之。後魏以後曰勿吉國、今則曰靺鞨焉。

つまり、肅慎とは周代から中国に朝貢してきた最も古い「北方東夷」であって、靺鞨人の先祖だということである。そうした肅慎の故地を王都に配当したことは、渤海という国がその伝統の上に立っていることの表明に他ならない。そして、肅慎を中核にして過去の諸種族が周囲に配分される中心地域の故地配列は、渤海が肅慎以来の「北方東夷」諸族を継承し、その伝統を引く諸種族を統合する国家であることの表象といえる。

渤海の統合意識がこのようなのだとすれば、統合すべきものの中心は肅慎直系の靺鞨諸族ということになり、高句麗は統合すべき諸種族の中には入るものの、位置づけ的には小さくなる。実際に「高麗故地」の状況を見ると、それは渤海の南西方に遍在し、高句麗の実領域よりかなり小さく、また故地の中心である西京鴨渚府は臨江で、高句麗の古都であった集安や桓仁ではない。^④ これでは渤海が高句麗の伝統を強く継承しているとはいえないであろう。故地配分上の高句麗は、あくまで渤海が継承・統合すべき重要な種族の

一つに過ぎず、国家統合のポイントとは見られていないのである。

このように見てくると、九世紀初の渤海は、国家統合のための歴史的權威を肅慎との連続性に求め、「北方東夷」諸族の世界を継承・統合するという統合意識を持っていたと考えられる。そして当然その境域観も「北方東夷」が活躍した場所全体となったはずで、特に靺鞨諸族の住地は肅慎以来の正統として領域化すべき対象と考えられていたものと思われる。こうした統合意識と境域観は、渤海の北進の正当性を保証すると同時に、八世紀初に強く主張されていた高句麗的權威に基づく境域観を含み込み、旧高句麗領確保の正当性も保証する。とすれば、この時期の渤海に高句麗継承意識があったとしても、それは「北方東夷」の系譜の中の高句麗継承と理解しなければならぬのである。

以上のように八世紀初から九世紀初の間に統合意識が変化したと筆者は考えるが、この推定を補強する史料がある。それは渤海の初興地問題で採り上げられる次の史料である。

『旧唐書』卷一九九下・北狄伝・渤海靺鞨

祚榮遂率其衆、東保桂婁之故地、據東牟山、築城以居之。

『五代会要』卷三〇・渤海

有高麗別種大舍利乞仲象、與靺鞨反人乞四比羽、走保遼東、分王高麗故地。(略)、大祚榮繼立、併有比羽之衆、勝兵丁戸四

十餘萬、保據挹婁故地。

かつて筆者は、『旧唐書』の伝える「桂婁故地」の原史料は唐側史料で、唐が渤海情報を集めた比較的早い時期のものであり、一方『五代会要』の「挹婁故地」の原史料は、張建章の『渤海国記』で、九世紀初の渤海側の認識を伝えるものであることを明らかにした。そしてこの記事の相違について、従来の研究がどちらが初興地として妥当かという問題の立て方をしていたのに対し、筆者は認識の主体と時期による相違として問題を立て直したが、それ以上突っ込んだ検討はできなかった。しかしよく考えてみるならば、『旧唐書』の認識のもと高句麗継承意識を前面に立てていた時期の渤海の情報を集積した結果であり、唐の一方的な思い込みというより、渤海がこのような歴史認識を唐に伝えていたと見るべきである。それ故に、皇太子の冊封号が桂婁郡王となり、それが權威を持ち得たのであろう。つまり、『旧唐書』の記事は八世紀初の渤海の高句麗継承意識を示す史料の一つなのである。

一方「挹婁故地」については、『渤海国記』の著者張建章の墓誌(八六七年)が渤海に使者として至ったことを「達忽汗州、州即挹婁故地」と記しており、「挹婁故地」は渤海全体もしくはその中心地域を指している。先掲の『通典』にあるように、唐代においては挹婁と肅慎は同じと認識されているから、この「挹婁故地」とは

「肅慎故地」とイコールと理解でき、先に見た渤海の肅慎継承意識をここからも確認できる。そしてこの認識を踏まえて『渤海国記』に基づく『五代会要』の記事を読むと、最初に「高麗故地」で王となり、その後靺鞨を吸収して「挹婁故地」を保つという変遷をしていることに気づく。筆者は過去の論者の見解に引っ張られてこれを狭い初興地の記事と理解していたが、そうではなく、「挹婁故地」は渤海がいかなる伝統を継承する世界の国家かを解説した部分であり、記事全体は高句麗世界に建国した渤海が靺鞨の吸収によって挹婁＝肅慎を軸として「北方東夷」諸族世界の存在に発展したという歴史認識を示したものになっているのである。つまり、九世紀初の渤海人の自国発展の歴史認識は先に見た統合意識の変化そのものである。

では、渤海の統合意識はいつ頃、いかなる契機で変化したのだろうか。節を改めてこの問題を検討しよう。

(3) 統合意識・境域観の変化の背景

八世紀初に見られる高句麗継承に正統性を見いだす高句麗世界統合の意識が、九世紀初には肅慎継承に正統性を見いだす「北方東夷」諸族統合意識に変化したとすれば、変化点として注目すべきは八世紀中・後期の大欽茂代（七三七～七九三）となろう。

大欽茂代が北方進出の時代であることは、既に見た。北方進出自体は前の大武芸代から行われた政策だが、北部靺鞨諸族を支配下に収めて統治していくのがこの時代である。その意味でこの時代には統治の正当性を強く主張する必要性があったといえる。そう考えたとき、それ以前に存在した高句麗継承意識は、高句麗が彼らを支配下に置いていなかった以上、正当性の保証装置たり得ない。これに対して肅慎継承意識が正当性を保証することは前述の通りである。つまり、この時代の中に継承意識を変化させるべき必要性が渤海国家に生じていたのである。そして、大欽茂代の中でも扈程・鉄利が服属した七五〇年代前後が、変化の上で重要な時期ではないかと推測される。

そのような目でこの頃の渤海の政策を見たとき、注目されるのが、七五〇年代前半に行われた王都上京竜泉府（現在の黒竜江省寧安県東京城）の建設と遷都である。上京竜泉府が建設された場所は、『新唐書』地理志七下所載の賈耽『道里記』に「至渤海王城、城臨忽汗海、其西南三十里有古肅慎城」とあるように、古肅慎城の東北わずか三〇里（約一六・八キロ）の地で、まさに当時肅慎故地の中心部と認識されている土地であった。この遷都が肅慎継承の意思表明たり得たことはいうまでもない。この時既に肅慎継承の意識は生まれていたのである。

また、上京竜泉府の位置は、渤海の中心地域の中で最も北方に位置し、当時の境域全体から見ても北方に遍在している。建国時の都である旧国（現在の吉林省敦化市）が北に鏡泊湖を含む山岳地帯を擁しているのと比べ、上京竜泉府は、北にさほどの山岳地帯はなく、盆地の南端に位置して北に開かれており、同じ北流する牡丹江水系であっても、北方への出易さが違う。この都の建設・遷都が北を意識していることは間違いない、わざわざ山岳地帯を越えて牡丹江を北に下ったというところに、北方進出・北部靺鞨統治重視の国家意思が表明されていると思われる。つまり、上京竜泉府の建設・遷都には肅慎継承意識と北部靺鞨統治とが見事に結合した形で現れているのである。先の継承意識と統治の正当性との考察の妥当性はここからも証明されよう。

一方、高句麗継承意識を前面に立てにくくなるような事件も、この頃起きている。もともと高句麗継承意識に伴う境域観は、唐・新羅領域内の旧高句麗領への進出、言い換えれば西進と南進の正当性と結びつく。そしてそのチャンスが七五五年から七六三年の安史の乱によって訪れる。渤海は唐との関係に距離を置くようになり、実際に西進して乱で唐の支配が不可能となった遼東を占領したと見られる節がある。また、日本からの働きかけを受け、乱で唐の支援が得られない新羅を討つ計画に参加しており、ここに南進の構えを見

ることもできる。ところが、七六二年に乱の収束がほぼ確定的となり、大欽茂が唐から渤海国王に進封されると、渤海の外交戦略は対唐関係の良好化に軸を置くことになる。賈耽『道里記』では遼東は唐の領域になっており、安史の乱の時期に渤海が占領していたとしても、その後撤退したことは明らかである。また新羅征討計画も、渤海からの申し出によるか日本からによるかは説が分かれるが、結局中止された。その後、七九〇年と八一二年に新羅から渤海に使者があり、新羅との緊張関係は緩和の方向へ向かったと見られる。

結局、安史の乱による唐の動揺は、高句麗継承意識を再び領域拡大の正当性保証装置として国家の統合意識・境域観の中心に押し上げる可能性を生んだが、乱の収束によって渤海の国家戦略は変化し、高句麗継承意識は肅慎継承意識を軸とする「北方東夷」諸族統合意識の中に吸収されていくものと思われる。大仁秀が即位すると、新羅と戦争を起こすが、先述のように旧高句麗領の確保を絶対視しておらず、ここに高句麗継承意識の質の変化を見ることができるのではあるまいか。

最後に、以上述べてきた渤海の統合意識と境域観の変化をまとめて、本章を締めくくりたい。建国当初の渤海は高句麗人や高句麗に服属していた南部靺鞨人を支配下に収めていたため、高句麗との

継承関係を重視し、これを国家統合の理念とした。そして旧高句麗領の中で領域を拡大しており、高句麗の旧領域が本来渤海が支配すべき領域であるという領域観を持っていたと思われる。これは唐・新羅との領域紛争を生み出す潜在的要素となっただけで、七三〇年代の唐渤海紛争を戦う正当性と少なからざる関係を有したのであろう。

しかし、西進・南進による旧高句麗領の回復は当時の国際情勢下では無理であり、拡大の方向は七二〇年代から北進中心となり、高句麗に支配されたことのない北部靺鞨を吸収していくことになる。そうになると、北進して北部靺鞨を支配することの正当性が必要になり、肅慎継承を中心とする「北方東夷」諸族の継承が国家理念として前面に打ち出されるようになる。七五〇年代前半の上京竜泉府への遷都はまさにこの理念の表明であった。従来からの高句麗継承意識は、「北方東夷」諸族継承意識の中に吸収されていくが、その時期は安史の乱期の唐・新羅との緊張関係が緩和した七六〇年代後半以降である。このように見てくると、大欽茂代は渤海国家の質の上での転換期であったといえる。そして九世紀初には肅慎継承が重視されて「北方東夷」諸族統合意識が確立し、その領域観も靺鞨住地を重視する北方に拡大したものとなったのである。ただし、高句麗継承も「北方東夷」諸族統合の中に入るので、南進・西進にも正当性が付与されたことは注意すべきである。それだけ渤海は領域拡大を国

際情勢に柔軟に対応して行い得るようになったともいえるのである。

四、おわりに

国家統合のための「歴史物語」を作るのは、何も近代国家ばかりではない。歴史上の国家の「歴史物語」を明らかにすることも、近代国家の「歴史物語」を相対化する上で意味のある作業と思われる。そうした観点で本稿では、統一新羅と渤海が、その国家が在った当時、どのような統合意識と領域観を持っていたかを見てきた。その結果、各々別の完結した「世界」の国家としての「歴史物語」をもっていったこと、そして個々の政治課題に沿って「歴史物語」が形成・変質したことが、確認できたものと思う。さらにそのことによって、「南北国時代」論の「物語」性が浮き彫りにされるとともに、歴史上の各国家あるいは時代が理念した「世界」の形成と解体という形で歴史を描く方法の、必要性和有効性が、少しは見えてきたのではなからうか。

とはいえ、本稿は多分に試論としての性格が強く、筆者自身、用語の適切性・諸見解の整理・史料調査等の不十分さにおいて、内心忸怩たる思いがある。今後、理論と実証の両面から本稿を補強・修正していくことを約束して、筆を擱くこととしたい。

〔註〕

(1)

渤海史を朝鮮史の中に位置づける上で画期的な意味を持ったのは、北朝鮮の朴時亨「渤海史研究のために」(『歴史科学』一九六二)一。邦訳は『古代朝鮮の基本問題』学生社、一九七四、所収)であった。韓国では、李祐成「南北朝時代と崔致遠」(『創作と批評』三八、一九七五。邦訳は『朝鮮史研究会会報』四六、一九七七、及び旗田巍監訳『韓国の歴史像』平凡社、一九八七、所収)が同様の論を展開し、渤海と新羅が南北に両立する時代を「南北朝時代」と呼んだ。日本にこの両者の主張を「南北朝時代」論と名付けて詳しく紹介したのが、浜田耕策「渤海史をめぐる朝鮮史学界の動向―共和国と韓国の『南北朝時代』論について」(『朝鮮学報』八六、一九七八)であり、また「南北朝時代」論の民族観・国家観を詳細に分析したのが、李成市「渤海史研究における国家と民族―『南北朝時代』論の検討を中心に―」(『朝鮮史研究会論文集』二五、一九八八)である。

(2)

註(1) 李成市論文によれば、こうした朝鮮史像を最初に提示したのは『朝鮮通史(上)』増補改訂版(朝鮮民主主義人民共和国科学院歴史研究所編、科学院出版社、一九六二)で、当該箇所の執筆者は朴時亨氏である。その後この歴史像は『朝鮮全史』(社会科学院歴史研究所編、科学・百科事典出版社、一九七九)に引き継がれ、北朝鮮の公式見解となっている。一方韓国では、宋基豪「渤海史研究におけるいくつかの問題点」

『季刊京郷』一五、一九八七。邦訳は『対岸諸国における渤海研究論文集』北陸電力、一九九七、所収)が北朝鮮の歴史像を批判して、本文のような歴史像を提唱する。一九九五年版の国定高等学校歴史教科書(その邦訳が『韓国の歴史―国定韓国高等学校歴史教科書』明石書店、一九九七)を見ると、説明不足によるわかりにくさはあるが、おおむねその見解に従っているように思われる。

(3)

中国の代表的な通史である王承礼『渤海簡史』(黒竜江人民出版社、一九八四)はこの歴史像に基づいて書かれている。また邦訳されている朱国忱・魏国忠『渤海史』(佐伯有清監訳・浜田耕策訳、東方書店、一九九六。原著は『渤海史稿』黒竜江省文物出版編輯室、一九八四)もその冒頭にこの歴史像が明示されている。

(4)

韓国・北朝鮮・中国の研究を分析し、現代の政治的要求との関連性を指摘する論稿としては、註(1) 李成市論文、同「渤海史をめぐる民族と国家―国民国家の境界をこえて―」(『歴史学研究』六二六、一九九一)、拙稿「古代における日本海沿岸諸地域間の交流―古代日朝間交流の一齣として―」(原尻英樹・六反田豊編『半島と列島のくにぐに』新幹社、一九九六)などがある。また一九九〇年代の日本の研究を概観したものととしては、酒寄雅志「日本における渤海史研究の成果と課題」(林陸朗・鈴木靖民編『日本古代の国家と祭儀』雄山閣、一九九六)がある。

(5)

朝鮮史においてこの動向を代表するものが、李成市氏の「表

象としての広開土王碑」(『思想』八四二、一九九四)、「古代史研究から見た異国」(『思想の科学』五三二、一九九五)、「古代史にみる国民国家の物語」(『世界』六一一、一九九五)などの一連の研究である。

- (6) 鈴木靖民「渤海の首領に関する予備的考察」(旗田巍先生古希記念会編『朝鮮歴史論集』上、龍溪書舎、一九七九。のち『古代対外関係史の研究』吉川弘文館、一九八五、に補訂収録、註(4)李成市論文、酒寄雅志「華夷思想の諸相」(ハアジアのなかの日本史Ⅴ『自意識と相互理解』、東京大学出版会、一九九三)、拙稿「渤海使の文化使節の側面の再検討―渤海後期の中華意識・対日意識と関連させて」(『東北大学東洋史論集』六、一九九五)など。

- (7) 酒寄雅志「東北アジアの動向と古代日本―渤海の視点から」(ハ新版古代の日本Ⅴ『アジアからみた古代日本』角川書店、一九九二)、註(4)拙稿。

- (8) 涇江以南には、漢州とは区別される独立した行政区画が置かれていた。その詳細については、末松保和「新羅の郡県制、特にその完成期の二三の問題」(『学習院大学文学部研究年報』二一、一九七五。のちハ末松保和朝鮮史著作集Ⅴ二「新羅の政治と社会」下、吉川弘文館、一九九五、所収)、木村誠「統一新羅の郡県制と涇江地方経営」(『朝鮮歴史論集』上、龍溪書舎、一九七九)、李成市「新羅兵制における涇江鎮典」(『早稲田大学文学研究紀要別冊』七、一九八一。のち『古代東アジアの民族と国家』岩波書店、一九九八、所収)など参照。

- (9) 池内宏「真興王の戊子巡境碑と新羅の東北境」(『朝鮮総督府古蹟調査特別報告』六、一九二八。のち『満鮮史研究』上世第二冊、吉川弘文館、一九六〇、所収)、李成市「八世紀新羅・渤海関係の一視角―『新唐書』新羅伝長人記事の再検討―」(『國學院雜誌』九二・四、一九九一。のち『古代東アジアの民族と国家』所収)。

- (10) 『三國史記』卷三五・地理志一・朔州に「朔庭郡、本高句麗比列忽郡」とある。

- (11) 長城の代表ともいえる万里の長城について、日本の内陸アジア史研究や中国史研究では、単に北方遊牧民族の侵入を防ぐ施設として捉える従来の理解をこえて、「可視化された境界の表象としての万里の長城」という新しい理解が生まれつつある。

- たとえば、沢田勲「匈奴―古代遊牧国家の興亡」(東方書店、一九九六)は、始皇帝が農耕社会と遊牧社会の間に明確な一線を画することによって中華意識を昂揚させ、両者の差異を明らかにしたと述べ、それは自らとは対立する異なった世界を容認することともなったと指摘する(一九頁)。万里の長城を特集した『月刊 しにか』一九九七年二月号でも、梅原郁氏は長城に黄河文明拡大の標識としての意味を読みとられ「万里の長城とはなにか」、岩井茂樹氏は平和時における華夷の境界としての機能の重要性を指摘している(騎馬民族にとっての長城)。

- (12) 拙稿「日渤海交渉開始期の東アジア情勢―渤海対日通交開始要因の再検討―」(『朝鮮史研究会論文集』二三、一九八六)。

- (13) 註(9)李成市論文。長人記事とは『新唐書』卷二二〇・東

夷伝・新羅の冒頭に見える、

新羅、弁韓苗裔也。居漢樂浪地、橫千里、縱三千里、東拒長人、東南日本、西百濟、南瀕海、北高麗。(略)長人者、人類長三丈、鋸牙鉤爪、黑毛覆身、不火食、噬禽獸、或搏人以食、得婦人、以治衣服。其國連山數十里、有峽、固以鐵關、號關門、新羅常屯弩士數千守之。

を指す。なおこの典拠は、天寶(七四二―七五六)末年頃にできたと見られる牛肅『紀聞』である(註(9)李成市論文、所収書三八九―九〇頁)。

- (14) 註(9) 李成市論文。『三國史記』卷七・新羅本紀・文武王一五(六七五)年条には「緣安北河設關城、又築鐵關城」、「三國遺事」卷二・紀異・文虎王法敏条には「安北河邊築鐵城」とある。なお、『三國史記』卷三五・地理志一・朔州の井泉郡条にある「築炭項關門」も同一のものと思われるが、景德王代築城と解釈できる可能性がある、ここでは別称の一つとしては挙げなかった。

- (15) 拙稿「環日本海諸「地域」間交流史の中の渤海―七―一〇世紀の航路の変遷を中心に―」(平成八―一〇年度科研費報告書『東アジア史における国家と地域社会』(代表高橋継男)、一九九八)

- (16) 註(7) 酒寄論文、註(3) 朱国忱・魏国忠著書五五―五六頁。なお、渤海の新羅侵攻を示すと見られるのは、『遼史』卷三八・地理志二・東京道・東京遼陽府の次の記事である

興遼縣。本漢平郭縣地、渤海改爲長寧縣。唐元和中、渤海

王大仁秀、南定新羅、北略諸部、開置郡邑、遂定今名。戸一千。

- (17) 『三國史記』卷三五・地理志一・漢州

取城郡、本高句麗冬忽。憲德王改名。今黃州。領縣三。土山縣、本高句麗息達、憲德王改名、今因之。唐嶽縣、本高句麗加火押、憲德王置縣改名、今中和縣。松嶠縣、本高句麗阿斯波衣縣、憲德王改名、今屬中和縣。

- (18) 「鼎峙」「鼎立」が天下三分の形勢をいう具体的用例を示しておく。

故能自擅江表、成鼎峙之業。〔三國志〕卷四七・吳書・吳主伝の評)

方今爲足下計、莫若兩利而俱存之、參分天下、鼎足而立、其勢莫敢先動。〔漢書〕卷四五・蒯通伝)

- (19) 『三國遺事』卷一・紀異・太宗春秋公

神文王時、唐高宗遣使新羅曰、「朕之聖考得賢臣魏徵・李淳風等、協心同德、一統天下、故爲太宗皇帝。汝新羅海外小國、有太宗之號、以僭天子之名、義在不忠、速改其號。」新羅王上表曰、「新羅雖小國、得聖臣金庾信、一統三國、故封爲太宗。」帝見表乃思、儲貳時、有天唱空云、「三十三天之一人降於新羅爲庾信。」紀在於書、出檢視之、驚懼不已、更遣使許無改太宗之號。

- (20) 拙稿「七世紀末から八世紀初にかけての新羅・唐関係―新羅外交史の一試論―」(『朝鮮學報』一〇七、一九八三)。

- (21) 『三國史記』卷三四・地理志一の序文には、

後與大唐侵滅二邦、平其土地、遂置九州。本國界內置三州、王城東北當唐恩浦路曰尚州、王城南曰良州、西曰康州。於故百濟國界置三州、百濟故城北熊津口曰熊州、次西南曰全州、次南曰武州。於高句麗南界置三州、從西第一曰漢州、次東曰朔州、又次東曰溟州。

とあり、地理志一・二・三はそれぞれ新羅本来の地・高句麗故地・百濟故地をまとめた巻として編纂されている。また各巻に見える各郡県の沿革記事には、必ずその巻に割り当てられた故地時代の旧名が記されており、三国争奪地域の郡県でも一国の旧名だけが記されている。

- (22) たとえば、『三国史記』卷八・新羅本紀・神文王五（六八五）年条には、

五年春、復置完山州、以龍元爲總管、挺居列州、以置靑州、始備九州、大阿湊福世爲總管。

とあり、故地配分が当時からあったかどうかはわからない。

- (23) 註（4）拙稿二九頁では、九州の三国均等配分を六八五年当時のことと見なして論を展開したが、ここでその理解を訂正する。

- (24) 黄寿永編『韓国金石遺文』第三版（一志社、一九八二）七八頁。第二石と第五石には「魏昕伊湊」という文言があるが、魏昕とは金陽の字である。彼が伊湊となった時期は、『三国史記』卷四四・金陽伝に、文聖王即位時（八三九）に伊湊の下蘇判になったとあり、『三国史記』卷一一・新羅本紀・文聖王四（八四二）年春三月条に「納伊湊魏昕之女爲妃」とある

ので、八三九年から八四二年の間である。その後、文聖王一〇（八四八）年にも伊湊であったことが新羅本紀で確認できる。彼の死は列伝によると大中十一（八五七）年八月十三日だから、この碑文の作成は八三九年から八五七年の間であろう。なお、「三」は本来碑片自体を欠いているが、意味上これ以外にはありえないので補った。

- (25) 『韓国金石遺文』第三版、一六〇頁。ただし「一家」は二字空欠となっており、ここは武田幸男「創寺縁起からみた新羅人の国際観」（『中村治兵衛先生古稀記念東洋史論叢』刀水書房、一九八六）によって補った。

- (26) 朝鮮総督府編『朝鮮金石総覧』（朝鮮総督府、一九一九）八五頁。

- (27) 『朝鮮金石総覧』八九頁。

- (28) たとえば、惠恭王代（七六五〜七七九）に書かれた「慶州高仙寺誓幢和上塔碑」（『朝鮮金石総覧』四一頁）は、

文武大王之理國也、早應天成、家邦□晏、恩開大造、功莫能宣、爲蠶□之乾坤、作黔□□□

と、文武王の治世を述べる。欠文が多いためその中に入らないとは断言できないのだが、現在読める部分からは「三国一統」的表現を確認できない。

- (29) 「上大師侍中狀」は、唐へ派遣された崔致遠が唐の高官に道中の援助を依頼した文書である。前半は、援助を心情的に導き出すために、新羅がいかに唐のたれに對百濟・高句麗・渤海戰で活躍してきたかが述べられているが、その前置きとして新羅・

百濟・高句麗三者の歴史的關係を示したのが、引用した一文である。これには簡潔に關係性を明示する効果があるが、三韓と三国の一对一对應を崔致遠の創作と見た場合、唐側の記録と全く異なるこの内容ではあまりに虚構が露骨すぎる。それ故、こうした言説が一部に流布していてこそ、こうした表現が可能だったのではないかと推測される。

(30) 『朝鮮金石總覽』一二―一七頁。

(31) 『三國史記』卷四〇・職官志下・外官・百濟人位条。

(32) 『三國史記』卷四〇・職官志下・外官・外位条。

(33) 『三國史記』卷四〇・職官志下・外官・高句麗人位条。

(34) 報徳国の詳細については、村上四男「新羅と小高句麗国」『朝鮮學報』三七・三八、一九六六。のち『朝鮮古代史研究』開明書院、一九七八、所収、鈴木靖民「百濟救援の役後の百濟および高句麗の使について」『日本歴史』二四一、一九六八参照。

(35) 金子修一「唐代冊封制一斑―周辺諸民族における「王」号と「国王」号―」(西嶋定生博士還暦記念論叢編集委員会編『東アジアにおける国家と農民』山川出版社、一九八四)参照。

(36) 九層幢の詳細については、末松保和「新羅幢停考」(『新羅史の諸問題』東洋文庫、一九五四。のち八末松保和朝鮮史著作集Ⅴ「新羅の政治と社会」下、所収)参照。

(37) 武田幸男氏は註(25)論文で、『三國遺事』卷三・塔像・皇竜寺九層塔条の立塔縁起を分析し、九層塔に託された調伏対象が新旧の縁起で異なり、旧は新羅時代のもので立塔當時を反映

すること、新は新羅末期から高麗にかけて説話が發展し高麗初期に整理されたことを明らかにされた。旧の縁起では調伏対象として高句麗・百濟・靺鞨が登場するが、新では高句麗・百濟が消えて靺鞨のみが残る。この変化こそ本文で述べた高句麗人・百濟人の融合と靺鞨人の異族化を端的に示しているものと思われる。

(38) 渤海の領域拡大過程については、未だ検討の余地が多く残されており、個別の問題について筆者と意見を異にする論も少なくない。ただ、それを逐一検討すると膨大な量となるので、ここでは註(4) 拙稿でも示した筆者の理解を概述し、個別問題の検討は別の機会に譲ることとする。なお、七三〇年代までは註(12) 拙稿で詳論しているので、参照されたい。

(39) 張建章『渤海国記』については、拙稿「渤海建国關係記事の再検討―中国側史料の基礎的研究―」(『朝鮮學報』一一三、一九八四)参照。また五京一五府六二州記事が『渤海国記』によることは、和田清「渤海国地理考」(『東洋學報』三六一四、一九五四)参照。

(40) 『新唐書』卷四三下・地理志七下所載賈耽『道里記』
一曰營州入安東道、二曰登州海行入高麗渤海道、(略)。營州東百八十里至燕郡城。又經汝羅守捉、渡遼水至安東都護府五百里、府、故漢襄平城也。東南至平壤城八百里、(略)、南至鴨綠江北泊灼城七百里、故安平縣也。(略)。登州東北海行、過大謝島・龜欽島・末島・烏湖島三百里。(略)、乃南傍海嘴、過烏牧島・貝江口・椒島、得新羅西北之長口鎮。

(略)、自鴨渚江口舟行百餘里、乃小舫泝流東北三十里至泊

汭口、得渤海之境。又泝流五百里、至丸都縣城、故高麗王都。又東北泝流二百里、至神州。又陸行四百里、至顯州。

天寶中王所都。又正北如東六百里、至渤海王城。

宋

- (41) 註(16) 参照。なお、註(2) 宋基豪論文・註(7) 酒寄論文は、渤海が新羅に侵攻して郡邑を置いたとするが、『遼史』の誤説と思われる。

- (42) 『遼史』卷一・太祖本紀上・太祖九(九一五)年十月条。なお、この記事に疑問を呈する説もあるが、それは成立しない。拙稿「いわゆる「小高句麗国」の存否問題」(『東洋史研究』五一二、一九九二) 参照。

- (43) 『続日本紀』卷一〇・聖武天皇神龜五(七二八)年正月甲寅条

諸

天皇御中宮、高齊德等上其王書并方物。其詞曰、武藝啓、山河異域、國土不同、延聽風猷、但增傾仰。伏惟大王、天朝受命、日本開基、奕葉重光、本枝百世。武藝忝當列國、濫愆編著、復高麗之舊居、有扶餘之遺俗。

- (44) 『冊府元龜』卷九六四・外臣部封冊一・開元七(七一九)年および八(七二〇)年条

七年三月、忽汗州都督渤海王大祚榮卒、遣使撫立其嫡子桂婁郡王大武藝、襲爲左驍衛大將軍渤海郡王忽汗州都督。

(八年八月) 是月、冊渤海郡王左驍衛大將軍大武藝嫡男大都利行爲桂婁郡王。

- (45) 拙稿「大門芸の亡命年時について―唐渤海紛争に至る渤海の情

勢―」(『集刊東洋学』五一、一九八四)の註44参照。

- (46) 石井正敏「日渤海交渉における渤海高句麗繼承国意識について」(『中央大学大学院研究年報』四、一九七五)。韓国ではこの石井見解に対し、渤海の繼承意識を日本が政治的に利用したのであって、対日国書などの外交文書に見える高句麗繼承意識はそのまま渤海国の意識と解するのが一般的に思われる。例えば、

宋基豪(浅井良純訳)「日本・渤海の国書に反映された内紛期の渤海社会」(『朝鮮学報』一五九、一九九〇)は、七八八年来日の大昌泰一行がもたらした国書の「慕化之勤、可尋蹤於高氏」(『類聚国史』卷一九三・延暦一七年二月壬寅条)を、「日本に使臣を派遣する誠意の根源を高句麗にもとめた」と解し、渤海の繼承意識が毅然として現れたものと見る。しかし、この文言はその前に出された桓武天皇の国書中の文言と対応するものであり、宋氏の解釈は朝貢の年限をめぐる一連の交渉中の文言であることを考慮しておらず、方法的に問題がある。この時期の交渉とその文言の意味については、石井正敏「光仁・桓武朝の日本と渤海」(佐伯有清先生古稀記念会編『日本古代の伝承と東アジア』吉川弘文館、一九九五)参照。

- (47) 註(4) 拙稿では、肅慎、獯貊、沃沮、高麗、扶餘をまとめて「満州世界」諸族と表現したが、表現の妥当性に問題が残った。そこで本稿では、これら各種族が各正史の東夷伝に北方の東夷として登場することに着目し、「北方東夷」諸族と表現することにした。

- (48) 「挹婁故地」「率賓故地」は「北方東夷」諸族と北部靺鞨諸族

のどちらに入れるべきかが明確でない。挹婁は「北方夷」の故族だが、虞婁＝挹婁との説があり、「挹婁故地」とは北部靺鞨「虞婁故地」のことである可能性がある。「率賓」は史書にこれに該当する種族名は出てこないが、渤海にそう呼ばれていた北部靺鞨があっても不可思議ではない。中国の史書では肅慎＝挹婁とするのが一般で、それが当時の歴史認識と見られるから「肅慎故地」があれば古族としての「挹婁故地」はなくて当然という見方もできる。ここでは虞婁＝挹婁説を採用し、「挹婁故地」から北部靺鞨諸族名と理解した。

- (49) 『三國志』卷三〇・魏書・東夷伝では、東沃沮の南に獒貊が居ることになっており、また「獒貊故地」に当てられた東京電原府のあたりは、北沃沮の住地とされている。

- (50) 肅慎と呼ばれた種族の住地を、中国の研究者は考古学的な成果も参考にして牡丹江流域に当てている。とすれば、上京・旧国の地は肅慎の故地に該当しても、海蘭河流域の中京は該当しない。

- (51) 中京に属する顯州が天宝安間に都であったことは、註(40)に引用した賈耽『道里記』に見える。また旧国に該当する場所が、『新唐書』渤海伝の五京一五府六一州記事ではよく分らないが、近接するのは上京・中京の区画であるから、その中のどれかの州に該当するか、特別区画として通常の行政区画外となっていたかのどちらかであろう。どちらであっても、故地区分上は「肅慎故地」に該当したものと思われる。

- (52) 集安の地が丸都県城で、その上流に西京の置かれた神州があ

ることは、註(40)に引用した賈耽『道里記』に見える。西京の地を吉林省臨江県とするのは現在の通説である。

- (53) 註(39) 拙稿。

- (54) 「張建章墓誌」一五〇一六行目。「張建章墓誌」については、徐自強「張建章墓誌考」(『文獻』二、一九七九)、註(39) 拙稿参照。

- (55) 渤海の遼東占領を直接に示す記事はないが、この時期に日本に派遣した使節の官名に遼東に存在した州の刺史があり、ここから推定されている。日野開三郎「安史の乱による唐の東北政策の後退と渤海の小高句麗国占領」(『史淵』九一、一九六三)のち「日野開三郎東洋史学論集」八「小高句麗国の研究」三一書房、一九八四、所収)、河内春人「東アジアにおける安史の乱の影響と新羅征討計画」(『日本歴史』五六一、一九九五)参照。

- (56) 日本の新羅征討計画と渤海との関係について、酒寄雅志「八世紀における日本の外交と東アジアの情勢―渤海と日本が新羅挾撃に関する同盟を結んだものと解するが、註(55) 河内論文は渤海には新羅出兵の余裕はなく、対新羅関係を有利に展開するために日本と新羅の対立の継続を望んでいたとする。

- (57) 註(55) 日野著書は、遼東にあった小高句麗国を安史の乱期に渤海が占領して属国化し続けたとするが、本文で述べたように遼東はその後唐領になっており、この説は首肯できない。なお、小高句麗国自体が存在しないことは、註(42) 拙稿参照。

また、註(39) 和田論文も安史の乱後に渤海が遼東経営を放棄したと見ている。

(58) 七六二年の渤海使王新福来日の目的を、渤海の新羅征討計画中止を伝えるためと理解するのは、石井正敏「初期日渤海交渉における一問題―新羅征討計画中止との関連をめぐって―」(『史学論集 対外関係と政治文化』一、吉川弘文館、一九七四)。
これに対し、この使者は依然新羅征討の機会であることを伝えるものとするのが、註(56) 酒寄論文、註(55) 河内論文である。

宋

(59) 『三國史記』卷一〇・新羅本紀・元聖王六年三月および憲德王四年九月の各条。渤海・新羅間の緊張緩和については、註(2) 森基豪論文、註(3) 朱国忱・魏国忠著書、酒寄雅志「渤海国家の史的展開と国際関係」(『朝鮮史研究会論文集』一六、一九七九) など参照。ただし、ここでの緊張緩和のイメージは論者によって異なっており、戦争に至るような緊張状態が解けて通常の対時関係に移ったのか、頻繁な交流による親密な関係に移ったのかは、改めて別に検討する必要がある。

〔補注〕

①新羅の重要な長城に、もう一つ、東北境の長城と同時期(七二二年)に対日防禦のために建設された、慶州地区南端の関門城Ⅱ毛伐郡城がある。これは日本との境界を意味しないが、絶対を守るべき内部としての慶州(畿内)とその外を分かち境界としての意味を持つ。中国の五服説を起原とする東アジアの天下観は、王か

らの距離Ⅱ徳化の度合で何段階かに世界を区分する同心円構造をしており、守るべき自己の世界にも何段階かのレベルが存在した。日本との間に海という可視化された境界が存したことが、対日防禦ラインとして一つ内側の境界Ⅱ畿内・畿外の境界をクローズアップさせ、関門城が建設されたのであろう。

②佐立春人「新羅文武王九年の敕書について(二)」(『法学論叢』一三一一・五、一九九二)は、この教を一〇世紀の『旧三國史』編纂時の造作と推定する。しかしその論証方法には疑問があり、造作理由への言及もないので、佐立説はまだ十分な説得力を持たないように思われる。

③校正中に、寛敏生「百濟王姓の成立と日本古代帝国」(『日本史研究』三一七、一九八九)に報徳国併合過程の検討があることを知った。新羅が「朝鮮三国」統一の意思を有したという理解を前提に分析する点には問題があるが、安勝冊封の評価などは本稿の理解を補完・深化させる面を持つ。安勝への金姓賜与の意味を考えるうえでも、日本の百濟王賜姓との対比は重要なので、是非参照されたい。

④田中俊明「新羅五小京の成立と国原小京」(上田正昭編『古代の日本と渡来文化』学生社、一九九七)は、この記事を外位廃止と解する通説に疑問を呈する。ただし、田中氏も六八六年までに外位が廃止されたと考えており、田中説が妥当であっても、本論の論旨を大幅に変更する必要はないものと思われる。

**SPECIAL ISSUE: KOREA AS A REGION
FROM THE STANDPOINT OF BOUNDARIES**
Bulletin of Society for Study in Korean History No. 36
(Résumé)

**HOW KANEKO FUMIKO AND YOSHINO SAKUZO
SAW KOREA: TOWARD
AN IMPROVED METHODOLOGY FOR GRASPING MODERN
JAPANESE VIEWS OF KOREA**

YAMADA Shōji

It has long been pointed out that modern Japanese views of Korea can only be grasped by presenting a complete picture of Japanese thought. There has been no methodological progress toward this goal, however, in fact, we seem to have reached a stalemate. This article was undertaken in search of a more fruitful methodology.

To prevent this from becoming an empty exercise in abstract theoretical speculation, I examine Kaneko Fumiko and Yoshino Sakuzō, seeking to achieve a better grasp of their views of Korea through a close examination of the internal links among each of their respective 1) views of Korea, 2) perceptions of Japan and the world, 3) and ways of life and inseparably linked ways of thought (in the case of Kaneko, the ego and nihilism revealed by her life experiences; in the case of Yoshino, his Christian faith and realism).

**VIEWS OF UNIFICATION AND BOUNDARIES IN LATE SILLA
AND PARHAE**

FURUHATA Tōru

We tend to uncritically project our contemporary views of the states and nation onto the past. This tendency can be seen especially clearly in

the historical images of Parhae prevalent in South and North Korea and in China, and in the tendency to use the term "unified Silla" in reference to Silla from the second half of the seventh century. To overcome such views of history, this article will examine what I call the "unification consciousness"—that is, what territories people saw their states as heirs to and as having unified—and "view of boundaries"—how far people saw their states as extending—of the people of later Silla (in this article I will not use the term "unified Silla" to refer unconditionally to Silla's unification of the Three Kingdoms) and Parhae.

First, examination of the "unification consciousness" and "view of boundaries" of the people of later Silla reveals the following.

① The Silla state, from the time in the 670s when it displayed the perception at home and abroad of the line between P'aegang and Yŏnghŭng Bay as its northern border until the ninth century, did not fundamentally change its view of that border and saw the area south of that border as its complete territory. This means that later Silla did not see the northern three-quarters of Koguryŏ as part of its territory.

② It cannot be confirmed from seventh and eighth century records that the people of Silla saw their country as having unified the Three Kingdoms (Koguryŏ, Paekche and Silla), but the Kŭmsŏk records show that they did have such a perception by the mid-ninth century at the latest.

③ The origins of the idea that Silla had unified the Three Kingdoms can be seen in the appearance in the seventh century of expressions treating three kingdoms as part of a single region such as "Headong samguk" and "Samhan." The necessary conditions for this consciousness were provided through the implementation in the latter half of the seventh century of policies designed to integrate the various ethnic groups of Koguryŏ and Paekche into Silla. At this stage, however, the Malgals were also an object of these policies of integration, and it was not until they were excluded from these policies, probably when Parhae came to be seen as a major external threat in the eighth century, that unification came to be clearly seen as something involving three kingdoms.

④ From the eighth century on, when the people of Silla came to see themselves as having unified the Three Kingdoms, there was a dissonance

between their territorial view and the state's official view regarding the territory of the former Koguryō. It can be argued that this dissonance led to the justification of expansion into former Koguryō territory, keeping alive forces that had emerged in later Silla.

Second, examination of the "unification consciousness" and "view of boundaries" of the people of Parhae reveals the following.

① In the first years of Parhae, continuity with Koguryō was important in guaranteeing the legitimacy of the state, but from the time Parhae began to move north in the 720s, this continuity began to fade as a source of authority.

② Analysis of references to the Parhae system of local administration in *Xint'angshu* shows that the Parhae state in the early ninth century sought to maintain its historical authority for state integration through continuity with the Su-chen people, that it had a "unification consciousness" of succeeding to and integrating the world of the so-called northern eastern-barbarians, and that it had a "view of boundaries" that it should incorporate the entire area in which these "barbarians" had been active into its territory. At the same time that this guaranteed the legitimacy of Parhae's northern advance, it also incorporated Parhae's insistence in the early eighth century that it was the successor to Koguryō and legitimized Parhae's claim to Koguryō's former territory. Parhae's view of itself in this period as the successor to Koguryō must be understood as one in which it succeeded Koguryō amid the lineage of the "northern eastern-barbarians."

③ The change from Parhae's view of itself as succeeding Koguryō to one in which it was the successor to the "northern eastern-barbarians" took place between the first half of the 750s, when the capital was moved back to Sanggyōng, and the latter half of the 760s, when strained relations with T'ang, shaken by the An Lu-shan rebellion, and Silla improved amid an international situation that made expansion in any direction other than to the north difficult.